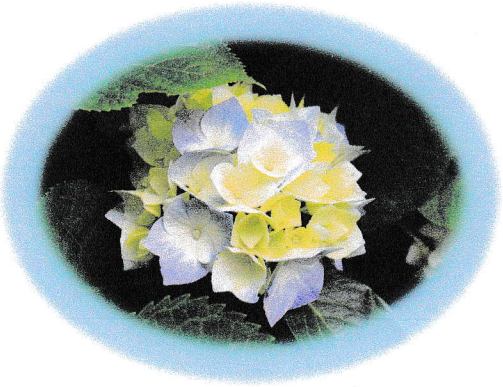
端から端まで探索することは不可能かな、と思うくらいでした。韓国は、色々マスコミなどに話題にのぼっていますが、もう殆ど日本と変わりないような雰囲気の国なのかな、と少し寂しい感想さえ抱きます。空港の税関の職員が、愛想がなかったというのも、印象に残っていますが・・・。

ところで、今回の旅行では、言語によるコミュニケーションをどうするか、ということも大きな課題でした。カンボジアは、クメール語という、独特の言語が現地で使われている、とガイドブックに書かれてあったので、先生からお借りしたクメール語の本の付属ＣＤを、自分のＳＤにダビングして、ステレオで聞いたりしてはいましたが、小生が勉強したことがある英語や中国語とは、まったく趣が違って、ちんぷんかんぷんでした。唯一覚えたのが、チョムリアップ・ソー（こんにちは）と、オークン（有難う）でした。唯、いざ現地に着いてみると、英語も分かる人もいるし、現地のガイドさんは、日本語が堪能な方もおられたので、そんなに言語で不自由した覚えはありません。小生の滅茶苦茶な英語でも、なんとか通じる場合があったことは、有り難いことでしたが、このときほど言語学習の大切さを感じた機会もなかったように思います。

では、取り敢えず、今回の旅行記の続きは、またのちほど書いてみたいと思いますので、拙い文章ですが、よかったら皆さまお付き合いくださいませ。

（つづく）

《アジアンスタイルのホテルの朝食から》